

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



「考える」ということ

子ども教育学部 英語・国際分野担当教員 戸谷敦子

「人間は弱い一本の葦にすぎない、しかし考える葦である。」、これは フランスの思想家パスカルが「パンセ」に遺した言葉です。私は英語や国際関係の教育を担当しています。そして講義では、出来るだけ学生さん達が「考える」ことを仕掛けたいと思っています。

例えば、今年の異文化理解の講義では、第2次世界大戦中に強制収容を体験した日系アメリカ人の歴史と、ヘイトスピーチの問題を取り上げ、「マジョリティ」と「マイノリティ」について考えました。特定の個人への攻撃は、名誉棄損やハラスメントとして法的に許されません。では、不特定のマイノリティ集団に対しての発言は、国際的にはどのように扱われているのでしょうか。例えば、アメリカでは言論の自由の下、ヘイトスピーチに法的規制はない一方、ヘイトスピーチは「公共の利益」を損なうとして、法学者のジェレミー・ウォルドロン等は規制を訴えています。世の中にはたくさんの「社会」がある。「健全な社会」とは、そこに不可欠なものは何なのだろうか、学生たちは考えました。

昨年は、教育コンテンツ国際コンクール（NHK 主催）で2007年度グランプリ（日本賞）に輝いた『特別授業 差別を知る～カナダ ある小学校の試み』（カナダ放送協会制作）を視聴しました。内容は、いじめ問題に苦悩した先生が、自分が実際に差別を受けたらどう感じるか、体験授業で子ども達に理解させることを試みます。背の高さによってグループを分け、優劣を伝えます。すると、クラスは見る見る分断され、便乗する子、泣く子、怒る子、沈黙する子、昨日までの楽しかった教室は苦痛に満ちた場所になります。翌日、グループの立場はそっくり入れかえられます。最後に先生は子ども達を集め、自分が異なる立場に立った時、それぞれどう感じたかについて話し合わせます。英語字幕付きのフランス語の映像を私の逐次通訳（もどき）で理解しながら、という大変な視聴ですが、学生は頑張っで見続けました。含蓄の多いドキュメンタリーに刺激され、「こんな実験自体、許されないと思う」、「いや、体験的に差別はいけないと認識をもたせることが出来たのではないか」、「周りに流されず、人を思いやる気持ちを持ち続けることで差別は減るのではないか」など学生の「考えること」はとても活発になりました。そして、冒険をおかしてまでカナダ人の先生が目指したもの、期待した子ども達の行動は何だったのかを考えました。VTRの最後、後日談の部分は、子ども達の純粋さが伝わり、視聴する者の心を救いました。

元厚生労働事務次官の村木厚子氏は、「共生社会とは何か」と題する日経新聞のインタビューで、「人には支える側と支えられる側がいるという考えは間違いで、いつでも選手交代になる。しかもある日突然そうなるということを知った。」と語っています。来年の講義では、この言葉を取り上げ、学生達と考えてみたいと思っています。

「だから、よく考えるように努めよう。

これこそ道徳（倫理）の原則である。」（パスカル「パンセ」より）